教師の思い出、家族の思い出に対する自伝的推論 —世代、教職志望との関連—

佐藤 浩一

(群馬大学 教育学研究科)

キーワード: 自伝的推論、世代、教職

Autobiographical reasoning to memories of teachers and family members: Effects of generation and orientation towards the teaching profession.

Koichi SATO

(Gunma University)

Key words: autobiographical reasoning, generation, teaching profession

目的

人は自己の経験を思い出すだけでなく、その経験を意味づけたり、現在の自己とのつながりを意識する。こうした自伝的推論の過程が、加齢によって、また、想起対象に関連する動機づけによって活発化するのかを検討する。

方法

1. 参加者 19～20歳代(以下「20歳代」)108名(平均19.9歳、男性31名、女性77名)、30歳代105名(平均34.1歳、男性33名、女性72名)、40歳代89名(平均43.6歳、男性37名、女性52名)、50歳代92名(平均53.6歳、男性46名、女性46名)であった。20歳代の参加者は教員養成系学部の大学生であり、30～50歳代の参加者は現職の教員であった。

2. 質問紙 自伝的記憶の想起、回想機能、ネガティブな経験の中心性、外傷後成長などの諸研究を参考に、自伝的推論の内容とプロセスに関わる26項目を作成した。あわせて記憶の鮮明度、詳細さ、感情価、感情強度を問う項目を各1項目ずつ設定した。また Big Five の5因子を測定するため、日本語版 TIPI(Ten Item Personality Inventory: 小塩ら, 2012)を用いた。

3. 手続き 講義や講習会等で質問紙を配布し、回答を求めた。参加者は中学時代の教師とのコミュニケーションの記憶と、家族とのコミュニケーションの記憶を一つずつ想起し、学年と具体的な内容を記述した上で、それぞれについて自伝的推論26項目と鮮明度等4項目に7段階で評定した。続いて、大学生は現時点での教職志望の強さを、現職教員は大学時代の教職志望の強さを、3段階で回答した。最後に日本語版 TIPI に回答した。

結果と考察

1. 因子分析 教師の記憶に対する自伝的推論に関わる26項目への回答に対して、最尤法、プロマックス回転を行い、因子数と解釈可能性から6因子解を採択した。6因子で全分散の74.9%が説明されていた。抽出された因子は以下の通りである。(1)教訓・成長因子(8項目、 $\alpha=.935$ 、例: この出来事から私は大切なことを学んだ)、(2)リハーサル因子(6項目、 $\alpha=.827$ 、例: この出来事が起こってからそのことについて何度も考えた)、(3)過去の自己因子(2項目、 $\alpha=.933$ 、例: この出来事はその当時の私がどんな人間か多くを教えてくれる)、(4)現在の自己因子(6項目、 $\alpha=.766$ 、例: この出来事は現在の私を非常によく表している)、(5)重要因子(2項目、 $\alpha=.952$ 、例: この出来事は重要であると確かに思う)、(6)転機因子(2項目、 $\alpha=.916$ 、例: この出来事は私の人生における転機だったと確かに思う)。なお、家族の記憶に対する評定に対して因子分析を行った場合も、同様の因子構造が確認された。

2. 評定値と世代・教職志望 各因子に含まれる項目のうち、因子負荷量が.40以上のものを用いて各因子の平均評定値を求め、世代(20・30・40・50歳代)×教職志望(強・中・弱)の分散分析を行った。記憶の鮮明度等についても、同様の分析を行った。

教師の記憶については、鮮明度、感情価、教訓・成長因子で教職志望の主効果が有意であった。また、リハーサル因子、現在の自己因子、転機因子で教職志望の主効果が有意傾向を示した(表1)。これらはいずれも、教職志望の強い人の評定値が高いことによる。過去の自己因子では世代の主効果が有意傾向($p<.10$)を示した(表2)。これは20歳代の評定値が30歳代・40歳代よりも高いことによる。世代×教職志望の交互作用は、いずれの因子でも有意ではなかった。

家族の記憶については、現在の自己因子で世代の主効果が有意傾向($p<.10$)を示した(表3)。これは50歳代の評定値が20歳代よりも高いことによる。教職志望の主効果、世代×教職志望の交互作用は、いずれの因子でも有意ではなかった。

これまでの研究では、自伝的推論は加齢に伴い活発化することが指摘されている。しかし本研究では世代の効果はほとんど見出されなかった。一方、教職志望の強かった回答者は、肯定的な感情を伴う教師とのコミュニケーションを詳細に想起していた。また、その出来事に対して何度も考え、「自分を成長させた」、「考え方や行動に影響を与えた」、「現在の私の中心になっている」、といった意味づけをしていた。今後は教職志望のような動機づけと自伝的推論が結びつくプロセスを詳細に検討することが必要である。

3. 自伝的推論と TIPI 自伝的推論の6因子と TIPI で測定した5因子との相関を検討した。因子間相関は-.13～.09であり、有意な相関はほとんど認められなかった。今後は特定の出来事に対する自伝的推論だけでなく、過去を意味づける傾向性と性格特性との関連を検討することが必要である。

表1 教師の記憶に対する平均評定と SD (教職志望の効果)

	強	中	弱	p
鮮明度	5.8 (1.2)	5.4 (1.4)	5.6 (1.4)	$p<.05$
感情価	4.3 (2.4)	3.5 (2.2)	3.9 (2.2)	$p<.05$
教訓・成長	5.0 (1.6)	4.6 (1.4)	4.5 (1.4)	$p<.01$
リハーサル	4.9 (1.5)	4.8 (1.7)	4.5 (1.6)	$p<.10$
現在の自己	4.2 (1.6)	3.8 (1.4)	3.9 (1.4)	$p<.10$
転機	4.2 (1.9)	4.0 (1.8)	3.8 (1.8)	$p<.10$

表2 教師の記憶に対する平均評定と SD (世代の効果)

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	p
過去の自己	5.2 (1.5)	4.7 (1.5)	4.7 (1.8)	5.1 (1.4)	$p<.10$

表3 家族の記憶に対する平均評定と SD (世代の効果)

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	p
現在の自己	3.8 (1.3)	4.2 (1.5)	4.2 (1.4)	4.4 (1.5)	$p<.10$

文献

小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ビノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ心理学研究, 21, 40-52.

※本研究は JSPS 科研費 25380870 の助成を受けた。